

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 20 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520078

研究課題名(和文) 自然的宗教史から見た人間存在における悪、死そして救いの構造研究

研究課題名(英文) The Problem of Salvation and German Idealism

研究代表者

諸岡 道比古(MOROOKA, Michihiko)

弘前大学・人文学部・教授

研究者番号：70133915

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円、(間接経費) 1,140,000円

研究成果の概要(和文)：諸宗教の多様性に気づいた近世ヨーロッパの思想家たちは、諸宗教の本質を自然的宗教という形で探究した。その自然的宗教は、思想家によってその名称は異なるものの、彼らにとっての理想的宗教である。この自然的宗教と多様な諸宗教との関係性は、自然的宗教を含んでいる限りでの諸宗教を認める立場と、諸宗教を認めそれら諸宗教を媒介として自然的宗教を実現しようとする立場とに分かれる。いずれの立場であれ、この自然的宗教を持つことにより、彼らは人間存在の現実的あり方を改め、理想的あり方を実現し、現在の生あるいは将来の生において救いに与ろうとする。

研究成果の概要(英文)：Natural religion(natürliche Religion) is not a religion of nature (Naturreligion), but a religion contemplated by philosophers. The latter is a worship of mountains, rivers, trees, etc. The former is an ideal religion that modern philosophers in Germany, especially the German idealists (Lessing, Kant, Fichte, Schelling, Hegel, Schleiermacher) considered to be the essence of religions throughout the world as they knew in their time. They sought to convert real and evil styles of living into ideal and virtuous styles of living through the power of their natural religion. According to their theory of human existence, they hoped that salvation would be realized in their lifetime or in their afterlife.

研究分野：宗教学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：自然的宗教 生と死 悪 救い

1. 研究開始当初の背景

人間が懐く悪しき考えや思わず行ってしまう悪しき行為を、人間は「宗教」によって改め、善き考え方をし、善き行為をするようになるのか、あるいは、そのように自分自身を変革することによって、悪しき行為をしていたその人間は救いに与れるのか、与れるとしたならば、その時期は何時なのか、はたまた、そうしたこと自体がそもそも不可能なことなのか、を検討しようと考えていたことが、この課題に取り組んだ動機であり、その背景である。

2. 研究の目的

近世ヨーロッパの人々は、宗教改革や大航海時代を経験することにより、宗教の多元性を認識するようになり、キリスト教をはじめ、世界各地に存在するそれら多種多様な宗教を、宗教たらしめるものは何か、宗教とは何か、宗教の本質とは何か、を探究し始めた。啓蒙期に生じたこうした思潮に答える形でヨーロッパの知識人(哲学者や思想家)たちによって示されたものが、多様な諸宗教の根底に存在する宗教としての「自然的宗教 die natürliche Religion」という考え方である。この自然的宗教は、彼ら知識人たちによって考え出された宗教の本質、真の宗教、あるべき宗教、宗教の理想像であるが、「積極的宗教 die positive Religion」(現に存在する宗教あるいは存在した宗教の意)のように現実的に存在する宗教ではなく、それら積極的宗教の根底に存在する宗教である。彼らにとっての理想の宗教であるこの自然的宗教を手懸かりにすることにより、彼らが考える人間存在のありよう(たとえば、カントは人間本性に内在する根本悪を、またシェリングは人間本性における根源悪を指摘している)を、ドイツ観念論思想ならびに同思想に影響を与えたり同思想を展開したりした思想において究明し、この人間存在がいかにして救われるか、また、救済される時期は何時か、その時期は死の前かあるいは後かを、死の問題との関係において分析、検討し、救いの構造を解明することが本研究の目的である。

3. 研究の方法

「自然的宗教」とは、キリスト教をはじめとした諸宗教を理解し、それらの本質を確定しようとする問いかけの結果、近世ヨーロッパの知識人たちによって考え出されたものである。この自然的宗教は山川草木をご神体とする「自然宗教 die Naturreligion」や啓示に基づく宗教とは異なり、実在はしないが、彼らにとっての理想の宗教、真の宗教であるとともに、人間本性に内在するもの、とされる。また、自然的宗教は宗教の分類概念であり、その名称は使用する人によって異なる。たとえば、カントは『単なる理性の限界内における宗教』でキリスト教、ユダヤ教、イスラーム等々の根底にある真の宗教として道

徳的宗教という名称を、シェリングは『啓示の哲学』において神話の宗教と啓示に基づく宗教とを媒介する真の宗教として哲学的宗教という名称を用いている。名称は異なるものの、彼らが考えた真の宗教を自然的宗教の一つとして考察し、自然的宗教からみた、彼らが提示する現実的人間存在のありよう(カントやシェリングのように、人間に根本悪や根源悪を指摘し、悪を重要視する見方、あるいはフィヒテやヘーゲルのように、悪を善実現の単なる障害と見、前者ほど悪を重要視しない見方)をまず提示し、その現実的ありようの克服(現在の生においてであるか、それとも将来の生であるか)を通じ、救いの有りようを明示することで、彼らの人間観を露呈させる。その上で、彼らの人間観より導き出される救済の構造を明らかにする。言い換えれば、人間存在の現実的ありようとその理想的ありようとの関係性において示される自然的宗教を手懸かりに、現実的ありようの克服と救いととの関係から救いの構造を解明する。

具体的には、こうした考え方にに基づき、ドイツ観念論思想に属する思想家たち(特にカント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲル)や、ドイツ観念論の父と呼ばれるレッシング、そしてドイツ観念論思想の影響を受けるとともに影響し合ったシュライエルマッハー、またカントやシュライエルマッハーの考え方を展開したR・オットーの人間観を彼らの考える自然的宗教を手懸かりにして解明する、というのが研究方法である。

4. 研究成果

ドイツ観念論思想に属する思想家たちが、現実的人間存在のありようを提示する際、善悪の基準とした法則は何であるか(それは人間の法則であるか、神の法則であるか)、また、その善悪の概念は道徳上の問題と宗教上の問題のどちらを優先するか(道徳的善悪を宗教的善悪に優先する、宗教的善悪を道徳的善悪に優先する、道徳的善悪と宗教的善悪を一致させる)、人間存在の現実的ありようを克服し、救いに与る時期はいつか(現在の生においてか、将来の生においてか)等々に関しては、報告者自身が今まで人間観をめぐる研究として検討し解明してきたところである。その研究成果の概略を、特に、論文としては「宗教と倫理 - ドイツ観念論思想を手掛かりとして -」(『宗教研究』、査読有、第361号、2009年、361-383頁、日本宗教学会刊)において公表した。また、その一般向け記述としては、『宗教学事典』の項目「善と悪」(丸善株式会社刊、『宗教学事典』、2010年、360-363頁)において、従来の哲学事典や倫理学事典で示される記述とは異なる宗教学的視点から示された善悪の記述として、その研究成果を示した。

自然的宗教から見たドイツ観念論思想に属する思想家たちの人間観をめぐる研究の

成果を踏まえ、ドイツ観念論思想に連なる思想家たちを取り上げ、彼らの人間観や救いに関する考え方を纏めた成果が、論文「レッシングとシェリングにおける自然的宗教について」(『人文社会論叢 - 人文科学篇 - 』、査読無、第 29 号、2013 年、1-18 頁)や「シュライエルマッハーとシェリングにおける自然的宗教について」(『人文社会論叢 - 人文科学篇 - 』、査読無、第 31 号、2014 年、1-18 頁)である。また、ドイツ観念論思想に属する思想家の継続的な研究成果としては、学会発表「フィヒテ宗教論の展開とシェリング」(2011 年、日本宗教学会)や論文「シェリングと神 - 後期哲学を中心として - 」(『東北哲学会年報』、査読有、第 29 号、2011 年、109-121 頁)がある。

これらの研究の概要は以下の通りである。論文「レッシングとシェリングにおける自然的宗教について」では、ドイツ観念論の父と言われるレッシングを取り上げ、彼の宗教論に関する主要著作『賢者ナータン』や『人類の教育』を、その他宗教論に関する作品『キリストの宗教』、『理性のキリスト教』、『啓示に基づく宗教の成立について』などを分析することで、レッシングの宗教思想ならびにドイツ観念論との関係の解明を行った。そこで明らかとなったのは、人類には自然的宗教が賦与されていたこと、この自然的宗教を人類は展開することができず、多神教や偶像崇拜あるいは唯一神を信仰する啓示に基づく積極的宗教を生み出したこと、これら積極的宗教を人類は信仰し、これらの信仰を通して、人類は教育され、今や啓示によって示された真理を理性真理に転換しながら人間完成の途を歩み、いずれの日にか、自然的宗教を実現する途上にいること、をレッシングが認めていた、ということである。また、これらの考え方と、たとえばカントや、とりわけシェリングの考え方との類似点と相違点を指摘することで、人間存在の現実的ありようと理想的ありよとの関係や救済の時期等を解明した。

論文「シュライエルマッハーとシェリングにおける自然的宗教について」においては、ドイツ観念論思想の影響を受けるとともに、影響を与え合ったシュライエルマッハーを取り上げ、彼の宗教論に関する二大名著『宗教について - 宗教を軽蔑する人々のうち教養ある人々への講演 - 』(以下『宗教論』)と『キリスト教信仰』を分析し、彼の宗教論と人間論の解明を行った。シュライエルマッハーは『宗教論』において、宗教を宇宙に対する直観と感情と定義するが、この直観はシェリングの知的直観といかに関係するか、またこの直観と感情は『キリスト教信仰』における絶対依存の感情とどのような関係にあるのか、という検討を行った。その上で、宇宙に対する直観と感情と定義された宗教が、シュライエルマッハーにとっては人間性の宗教であることを明らかにした。言い換えれば、

宇宙は哲学・道徳・宗教それぞれの関わり方において三領域の対象になるが、それ自体においては同一の対象である。この同一の宇宙は有限な人間存在にとっては差しあたり人間性に他ならないことを、『宗教論』を徹底的に分析することにより提示した。その上で、シュライエルマッハーが述べている根本直観に基づく宗教はいわゆる積極的宗教ではなく、彼が否定していた自然的宗教とは異なるものの、人間本性のなかに存在する人間性の宗教であり、ある種の自然的宗教であることを明示した。この指摘に基づき、シュライエルマッハーの救いについての考えや人間観を、シェリングのそれとの比較において提示した。

ドイツ観念論に属する思想家の発展的研究としては、学会発表「フィヒテ宗教論の展開とシェリング」でフィヒテの宗教論を最初期から最晩期まで通覧して、その自然的宗教に関する考え方を解明した。また、論文「シェリングと神 - 後期哲学を中心として - 」において、『近世哲学史講義』や『啓示の哲学』における神観念を自然との関係から明らかにし、人間存在を含めた自然と神との関係から現実の人間のありようをより深く考察した。

自然的宗教を手懸かりにした、このような人間存在をめぐる検討から明らかになってきたことは、ドイツ観念論思想に関わる思想家たちの人間存在理解やその位置づけは、それぞれ異なり、各人各様であるものの、自然的宗教に関してある特徴が見えてくる。それは、自然的宗教と積極的宗教との関係をいかに見るか、ということにおける特徴であり、その見方は二種類に区別することができる。カントの述べるように、積極的宗教を自然的宗教の乗り物としてのみ認める立場と、積極的宗教をそのものとして認める立場とである。前者にはカントやフィヒテが、後者にはレッシングをはじめとしてシェリングやシュライエルマッハーが属している。このような分類は宗教学成立前史としての自然的宗教史を構成するものである。この成立前史を検討することは現代宗教学の再構築に大きな寄与を為すとともに、宗教学の発展に貢献する、と思われる。また、人間存在の現実的ありよとの検討から、その克服を通して救いへと到る道筋を辿る、自然的宗教を手懸かりにしたこの宗教学的視点こそ、哲学的あるいは倫理的考察とは異なる包括的な人間存在理解、言うなれば、全体的人間理解を確立することができる、と思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

諸岡道比古、「シュライエルマッハーとシェリングにおける自然的宗教について」、『人

文社会論叢 - 人文科学篇 - 』、査読無、第 31 号、2014 年、1-18 頁。

諸岡道比古、「レッシングとシェリングにおける自然的宗教について」、『人文社会論叢 - 人文科学篇 - 』、査読無、第 29 号、2013 年、1-18 頁。

諸岡道比古、「シェリングと神 - 後期哲学を中心として - 』、『東北哲学会年報』、査読有、第 29 号、2011 年、109-121 頁。

〔学会発表〕(計 4 件)

諸岡道比古、シェリングとシュライエルマッハーにおける自然的宗教について、2013 年 9 月 8 日、日本宗教学会、國學院大學。

諸岡道比古、シェリングとレッシングにおける自然的宗教について、2012 年 9 月 8 日、日本宗教学会、皇學館大学。

諸岡道比古、シェリングと神 - 後期哲学を中心として、2011 年 10 月 22 日、東北哲学会、弘前大学。

諸岡道比古、フィヒテ宗教論の展開とシェリング、2011 年 9 月 4 日、日本宗教学会、関西学院大学。

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

諸岡 道比古 (MOROOKA Michihiko)

弘前大学人文学部・教授

研究者番号：70133915

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：